

## 第二十一章 ジレンマ

第二の地球を求めて宇宙に旅立ったノロに同行したグレーデッドの一派はノロのアイディアをすべて実現させる能力を持っていた。一方、中華民国新疆ウイルス自治領に潜り込んだグレーデッドも劣らず優秀でしかも強烈な独創性を持っている。だからと言うわけではないが量産が不得意のようだ。というより中華民国の自治領内で秘密裏に大量生産できないのだろう。量より質と言わんばかりに製造された各戦車が強烈な個性を持つのは当然だった。

中華民国はソシアの友好国だ。しかし、一方的にウクライナー共和国に侵攻したソシアに肩を持つと世界中から批判を受ける。そこで国連でソシアに関する議案が上がると少なくとも「棄権」するので議論が空回りする。もちろんこのようなことは今に始まったことではない。

ウイルス族化したグレーデッドはソシアのウクライナー侵攻を何とか阻止しようとレッド・エレファントなどの戦車を製造してウクライナーに送り込んだ。

\*

「ノロもカブトムシやクワガタムシ型の宇宙戦闘機を造ったな」  
榊が懐かしそうに思い出すとイリも同調する。

「すごかったわ。異次元宇宙で敵戦闘機を次々と撃破……」

イリが一旦言葉を止める。そして続ける。

「私が言いたいのは今のウイルス族に溶け込んだグレーデッドの人はひよっとしてみんなノロに似てるんじゃないかと……」

「特急イリ・ライナーで新疆ウイルス自治領の首都ワクチン駅に着いたとき、出迎えてくれた人たちは……何というか……」

イリは加藤のじれったい言葉を映像化するように発する。

『『短足で腹の出た人はいなかった』と言いたいのでしょ』

「決して……」

榊が加藤の言い訳を切断する。

「独創的な発想は体型とは関係ない」

イリの機嫌が少し悪くなったと感じたのか、榊は探るように言葉を並べ始める。

「奇抜な戦車でソシア軍を退けて戦争を止めさせようとしているのは分かるが、それなら国連を通して……」

加藤が介入する。

「国連なんて無力だ。ソシアはすぐ拒否権を行使する。それに中華民国は棄権する」

イリは頷きながら首を傾げる。

「その中華民国は身内のウイルス族の行動に気付いてないのかしら」

「そういえばそうだ。俺たちは宇宙戦艦から観察しているし、実際新疆ウイルス自治領に行つて状況を把握している」

榊の言葉にイリが待ったをかける。

「私たち、完全に把握しているとは言えないわ」

加藤が視線を右端から左端に移動させてからゆつくりと戻す。

「あの奇妙な戦車をウイルス族、いやウイルス族を装うグレーデッドの残党が製造したと断定したが、きっちり検証したわけではない」

「確かに」

榊が合いの手を入れる。

「私たちどこでそう決め込んでしまったのかしら？」

検証が始まる。

\*

「少なくともウイルス族の一部がグレーデッドの残党であることはハッキリしている」

榊が検証のスタート地点を定める。ウイルス族と同じように中華民国の自治領だったイリ族の女王、そして一時的にせよグレーデッドの総統だったイリが大きく頷く。

「巧妙にウイルス族に紛れ込んだことは間違いはないわ。要するに目立つことはしない」

「懐に入ってしまったえば見えなくなる」

加藤が補強する。

「そうだとにしても誰にも気付かれずにあんな戦車を製造できるのだろうか」

「雰囲気的には間違いないわ」

総統経験があるイリだからこう判断したのだろう。しかもノロから時空間移動装置を譲り受けていたはずだ。だからこれらの特殊な戦車が忽然とウクライナー共和国に現れた。

「でも窮屈な支援だわ。今の地球上の最大の懸案はソシア軍のウクライナー共和国への軍事侵攻だけど、他にもいろいろな難問があるわ。いったい人間は……というより権力者は何をしたいのかしら」

「それにしてもウイルス族はなぜ中華民国に留まっているんだ？」

イリの影のように目立たないように寄り添う長老に視線が移る。以前は何かにつけ口を挟んでいた長老は最近ほとんど意見することはない。

「長老。体調は？」

「申し分なく良好じゃ」

「見てのとおりだけど長老として何か思うところはありますか」

「ウイルス族とグレーデッドの元構成員はまったく別者じゃ」

\*

イリはグレーデッドの構成員の国籍が様々であることを思い出す。一方ウイルス族を構成す

るのはイリ族やウズベキスタン族、つまりトルキスタン族でトルコ系の人たちだ。あの巨大帝国のオスウーマントルコの流れをくむ勇猛な民族だ。一部ルールマニア族などを巻き込んで、いるが、血統としてはトルコ系に属する。イスラム教を信仰するが表面的な自治権しか認められていない。それどころか迫害されることもある。だがそれがいい隠れ蓑になっていると長老が奇妙な指摘をする。

「劣っているという隠れ蓑。本当は驚くほどの科学力を持っているのじゃ」

イリが納得する。

「イリ族は独立しようとしたから痛い目に遭ったわ。でもノロのお陰で独立できた。長老にも随分苦勞をかけたわ」

「滅相もない。爺やは大満足、幸せじゃ」

「さて……」

榊が今後どうするのかと提案しようとする。するとイリが先走る。

「すごい戦車だが四両しかないわ。これでソシア軍を押し返せるのかしら」

「ソシア陸軍を押し返している。空軍にも仕事をさせない。問題は海軍。ブラックシー艦隊には通用しない。戦車は泳げないからじゃ」

「巡洋艦や駆逐艦からのミサイル攻撃を何とか防いでいるが、集中的にミサイルが発射されると対抗できない」

今やウクライア―共和国の被害のほとんどが軍艦からの無差別大量集中ミサイル攻撃によるものだ。加藤と榊の会話が続く。

「内陸の新疆ウイルス自治領では船を造るのは難しいだろう。できたとしても時空間移動装置でブラックシーまで運ぶには大きすぎる」

「超小型で膨張型の潜水艦なら……」